

第Ⅱ部 第1セッション「東南アジア」

コメンテーター：藤井勝

(1) 発表者への個別のコメント

<新井先生分>

○「預言者一族」の歴史等について。東南アジア島嶼部へのイスラームの本格的な普及は、15世紀頃とされているが、発表では、今日のインドネシアの「預言者一族」は、18世紀以降からの現イエメン出身の「預言者一族」の移住によって形成されたとしている。その場合、18世紀以前の200～300年間には、今日のインドネシアの地域には、「預言者の一族」は存在しなかったのか。存在しなかったとすれば、それなくしてもイスラーム社会は成り立ちうるものなのか。また、存在したとすれば、どのようなかたちで存在したのか。加えて、今日のインドネシアの「預言者一族」は、一般民衆にどの程度認知されたり、支持されたりしているのか。

○「預言者の一族」、あるいはアラブ系ムスリムの家族や親族について。『系図が語る世界史』所収の新井先生の論考では、現イエメン地域からの移住は主に単身の男子であり、移住先で現地の女性と結婚したので、「預言者一族」の家系も世代が下るにつれて、サイドとしての意識や文化の継承が困難になり、それが系図作成の契機にもなったとされている。そこで知りたいのは、インドネシアの「預言者一族」は、今日まで、父系血縁意識をもち、一般の民衆とは異なる、独自の父系家族・親族組織を形成しているのか。またその配偶者は、どのように選択されてきたのかである。さらに、「預言者の一族」に限らず、アラブ系ムスリムは、どのような家族・親族を形成し、今日に至っているのか。また独自の父系社会を形成しているのかなども、知りたいところである。

○東南アジアのなかの「預言者一族」について。発表の守備範囲からはすこし外れるかもしれないが、東南アジア全体に広げてみた時、他の国では「預言者一族」はどのように存在しているのか。インドネシアと同じ状況なのか。イスラームは島嶼部だけではなく、数は少ないが、大陸部のタイやカンボジアなどでもある程度受容されているが、そこにも「預言者一族」は存在し、社会的影響力をもつのかなどである。

<永野先生分>

○系図の作成について。新井先生が発表された「預言者一族」や、佐藤先生が発表されたクイーの家系（トラクーン）の場合は、系図が存在したり、新たに作成されたりしているが、バリの場合、父系親族（ダディア）の系譜は、どのようにして人々に共有されているのか。系図のようなものは存在するか、あるいは口頭による伝承があるだけなのか。

○屋敷地共住集団について。永野先生の研究の特色は、水野浩一氏のタイ東北部研究の成果である屋敷地共住集団論を、バリ村落研究へ適用したことにあると思う。それは、東南アジアにおける大陸部と島嶼部の家族・親族研究を横断的に比較することを可能にするもので、今後の研究の発展が大いに期待される。そこで、バリの屋敷地共住集団はタイ東北部のそれとは、どのような点で共通し、また異なるかについて、考えを教えてください。佐藤先生にご意見をうかがうほうがよいが、私の知る範囲では、相続の違いだけではなく、屋敷地共住集団の質が大きく違うように思われる。たとえば、タイ東北部の屋敷地共住集団は、屋敷地がしっかり区切られたり、門が作られたりすることはなく、内部で宗教的な儀礼が日々行われことはなく、さらに何世代も長期に維持されることもないように思う。その意味では、屋敷地共住集団という概念は、むしろバリ島の屋敷地共住集団のためにあるようにさえ感じられる。永野先生は、こうした点をどのように認識し、今後の比較研究をどのように展開したいと考えておられるのか。

○インドネシアにおけるバリの位置づけについて。インドネシアでは、人口が多いジャワ島などでは、家族は核家族的で、親族関係は双系的と考えられている。そのなかでバリの家族・親族は際だった特色がある。一方で、東側の非イスラム圏の地域では、小池誠先生のスンバ島の研究などが示すように、伝統的に父系出自集団が存在することも知られている。つまりバリの家族・親族は、インドネシア社会のなかで特異なものか、それとも、インドネシアのなかの1つの類型なのか。

<佐藤先生分>

○事例村落等の基本情報について。いろいろな側面から家系（トラクーン）の分析がなされ、大変理解しやすかったが、その背景として、以下のような点について教えていただきたい。

①クンシット系のトラクーンは、彼らが居住するN村やT村のなかで、どの程度の人口や世帯の割合を占めているのか。またクン・シット系のトラクーン以外に幾つ程度のトラクーン

が村落にあるのか。北原淳氏らのタイ中部村落の研究では、村落内に複数のトラクーンがあったと思われるが、事例の場合はどうか。②トラクーンは、系図作成や儀礼だけではなく、村落の生活のなかでどのように機能しているのか。N村やT村はクイー族だけから構成されるのか。クメール族やラーオ族は住んでいないのか。

○クンシット一族によるトラクーン形成について。私がいままで調査等で訪問したことのあつた村落では、このような開拓者である祖先の像に巡り合うことはなかったもので、非常に驚いた。大いに勉強にもなった。ところで、クンシットの「クン」は、かつてのタイの官位付与制度（バンダーサック）の中の下位の官位のことであると思われる。したがって、「クン」の官位を持つことは、クンシットの家系は、高位ではないとしても、普通の農民ではないようである。佐藤先生も、こうしたクンシット一族の地位の高さに言及している。とくに、イサーンの農村部という中では、相当に高い地位にあるように思われる。また、その意味では、クンシット家系の事例は、一般の農民のトラクーンの生成と異なる面もあると思われるが、どのように考えたらよいか。また、クンシット系のトラクーン形成の動きは、周囲、また周辺の地域社会でのトラクーン形成の動きを生み出すなどの影響を与えているか。

○屋敷地共住集団との関係について。永野先生の発表をふまえると、バリの村落もタイ東北部の村落も、屋敷地共住集団をもつ社会である。バリ村落の場合は、各屋敷地共住集団は原則として父系親族集団であり、また村落内の複数の屋敷地共住集団が父系関係でつながっている。この点をふまえて、事例となるN村やT村では、トラクーンは屋敷地共住集団とどのような関係にあるのか。屋敷地共住集団はトラクーンの分節単位になるのか、それともならないのか。永野先生のバリ島の事例との比較という観点から、教えていただきたい。

(2) 発表者全員への共通コメント

○系譜・系図と宗教文化の関係について。東南アジアは多民族であるだけでなく、多宗教である。本セクションでも、イスラーム教、ヒンドゥー教、上座部仏教を受容した社会が取り上げられた。他に、キリスト教、華人移住者の持ち込んだ道教・儒教などがある。もちろんアミニズムなどの基層的信仰もある。こういう宗教文化と家族制度・規範の関係はどのように考えればよいか。それぞれの発表者が取り上げた対象との関連で、考えを教えてください。

新井先生には、むしろ「預言者一族」ではない、土着のインドネシア人、つまりマレー系の人々に関して、お考えを聞きたい。「預言者一族」では宗教上の立場から父系血縁が重要な価値となっていると思われるが、従来の研究では、ジャワ島などの普通のムスリムについては核家族優位で、親族関係は双系的とされている。一方で、trah と呼ばれる、祖先を共有す

る親族集団が存在するとの報告もある。イスラームは、それを受容する土着社会の家族のあり方にどのような影響をおよぼすのか。

永野先生には、バリの父系親族とヒンドゥー教の関係について、お考えを聞きたい。つまり、インドネシアでは、イスラームを受容した地域ではあまり父系社会が形成されなかったのに、イスラーム化から距離を置いたバリでは父系出自が重要性をもつという状況が生まれている。これはどのように考えればよいのか、ヒンドゥーの影響はあるのかなど、である。

佐藤先生には、トラクーン形成とタイの宗教文化の関係に関して、お考えを聞きたい。発表では、クワイ族は民間信仰を含めて複数の宗教文化のもつことが示されているが、トラクーンや家系意識の形成には、宗教文化が何らか関与しているのか。上座部仏教、また、タイ人にとっては比較的身近な華人の宗教文化（道教・儒教）からの影響はあるか、などである。

○系譜や系図の将来について。このセッションでは、3つの発表すべてで、系譜や家系が現代社会において存在し機能する事例が考察された。伝統として引き継がれてきた場合もあれば、新しく創造された場合もあるが、いずれにしても、現代に生きる系譜や系図であることになる。これらの系譜・系図、そのもとでの家族や親族の姿は、今後どのように展開すると見通されているのか、それぞれの先生のお考えをうかがいたい。